絵本をめぐって

木村　佐千子

柳田邦男先生

「絵本」ということばは何とやさしく、思い出をかきたてる響きなのでしょう。自分が子どもの頃に読んだ絵本も、息子と一緒に絵本を読んだことも、大切な思い出です。

絵本についての一番古い思い出は、幼稚園で毎月、月刊絵本が配られるのがとても嬉しかったことです。大事に持ち帰り、家に帰るとすぐ夢中になって読んでおりましたので、母は、「本が好きなのね」と笑っていました。母は仕事が忙しかったこともあり、それほど読み聞かせをしてもらった記憶はありません。むしろシッターさんなどによく読んでもらっていたのだと思います。

息子が生まれると、自分が子どもの頃に好きだった絵本を思い出しては、探して息子のために買うようになりました。私が子どもの頃、一番好きだった絵本は、『ちいさいおうち』でした。作者名も覚えておらず、古い本なので、もう手に入らないかしらと思っておりましたが、息子が幼稚園に入った頃でしたか、探してみると、まだありました。「岩波の子どもの本」シリーズです。なつかしい絵本がなが

く愛され続けていることを、とても嬉しく思いました。私が持っていたのは、もっと大判で、イラストも違ったと思います。まったく同じものは見つけられませんでしたが、オリジナルの挿絵の方が素敵だと思い、新しい気持ちで味わいました。

『ちいさいおうち』は、何度も息子に読み聞かせました。ちょっと長めなので、最初は半分ずつ。それから続けて。作者のバージニア・リー・バートンさんのほかの絵本も読んでみたくなって、いろいろと購入しました。鉄道が大好きな息子は『いたずらきかんしゃ　ちゅうちゅう』や『ちいさいケーブルカーのメーベル』がお気に入りで、何度読んだか知れません。これらの絵本は、もちろん今でも息子のガラス戸付き本棚に並んでいます。私の母は、ものを片づけるのが得意な人で、私が子どもの頃に読んだ本はきれいさっぱり捨てられてしまいましたが、息子の絵本はずっと大事に置いておきたいと思います。たとえ頻繁に取り出して読むことはなくなっても、心の栄養だと思うからです。

息子は読み聞かせが大好きで、「本を読もうか」と言うとすぐに来てぴったり身体を寄せて、あるいは膝の上にのぼって聞いてました。小学校４年生になっても、３ヶ月位前まで、毎晩、眠る前には読み聞かせをしていました。新しい本を買うと、一緒に

わくわくしながら読みました。柳田先生おすすめの本も、いろいろ読みました。けれども、３年生も後半になった頃から、物語や興味のある分野の本なら自分で文庫本も読めるようになり、『ニュースのことば１００』のような本を、分からないところは質問しながら読んでもらう方が好きになっていたようです。そして、４年生の１学期の途中から、私の仕事がとても忙しくなって眠る前の読み聞かせをする余裕がなくなると、いつの間にか息子との毎日の読み聞かせタイムはなくなっていました。少し寂しいです。息子は、夏休みには、ひとりで夏目漱石の『我が輩は猫である』を読んでいました。４年生の子に分かるのかしらと思いました。去年『坊っちゃん』を一緒に読んで、おもしろかったから読めたのでしょうか。子育ての目標は、自立だといいます。それならば、小さい頃からの絵本の読み聞かせが、こうやって自分で本が読めるようになる（自立する）手助けになったのかなと考えたいと思います。本の好きな子に育っているのは、とても嬉しいです。

図書館できれいな絵本、ひかれる絵本を見つけると、今でも時々、息子のために借りてきて、目につくところに置いておきます。すると、空き時間に自分で開いて読んでいます。難しい本が読めるようになっても、やはり絵本は心が安らぐのではないでし

ょうか。また久しぶりに、『ちいさいおうち』を息子に読み聞かせてみたいと思います。息子は、まだ寄って来てくれるでしょうか。

今後も、素敵な絵本をたくさん紹介してください。楽しみにしております。

木村佐千子